

マルクス解釈としての疎外論の発展

— 一次元的理解から四次元的理解へ —

今 井 里 穂

はじめに

マルクスは、資本主義生産過程に携わる労働者が「自己疎外」の状態にあることを最初に指摘した人物である。日本語の疎外という言葉は除け者にされるという意味で「疎外感」という用法をされることが主であるが、哲学用語としての「疎外」〔*Entfremdung*〕は、自己に対して何物かがよそよそしく対立した様子で現れてくることを意味する。中でも「自己疎外」は、自分自身が自己からよそよそしく感じられるという病的な状態を表す。労働における自己疎外の代表的な例としては、工場において機械の手足となっている非熟練労働者や、本心とは異なる言動を取らなければならない感情労働に従事する労働者などが挙げられる（Blauner1967, Hochschild1983）。さらに近年の研究では、一見熟練した知識労働者であっても、学生ローンなどの債務に人生の選択を縛られていたり、「ブルシット・ジョブ」と呼ばれるような労働者自身が内心くだらないと見なしている仕事に従事していたりする労働者の在り方が、新たな疎外の実例として見出されている¹⁾（Lazzarato2011, Graeber2018）。

このように労働における疎外（以下、単に「疎外」とする）とは、資本主義生産過程において、労働者が構造的に非人間的な状態に陥っている状態を指す。それ故に疎外は、資本主義そのものに対する根本的な批判を提示する重要概念である。しかしながらその反面、その批判の根拠が曖昧なまま、資本主義の「非人間性」を糾弾するジャーゴンに墮落しかねないという危険も孕んでいる。したがって、疎外の論理的構造とそれが批判的概念である価値的な根拠は何かということ、今一度確認することが重要であると思われる。

マルクスにおける「疎外」概念をめぐるこれまでの研究は、一つの中心文献を子細に検討することを通して、著者独自の解釈を提示するというものが基本であった。同時に、マルクスの前後の著作の差異を強調することによってある一点におけるパラダイムチェンジを主張するか、もしくは反対に、前後の著作にも自らの理解する疎外論を見出すというものが多く見られた。ところが、後期著作にまで検討が進んだ今、改めて研究史を整理すると、疎外論研究はその中心文献を初期著作から後期著作へと移しながら、まるでマルクス自身の思想を後追いするように進展してきたことが浮かび上がってきた。そこで本論文では、主に日本における研究史とマルクス自身の思想変遷を重ね合わせて概観することによって、両者の発展過程とその到達点を明らかにする。

結論として、マルクスの疎外論の展開は、当初の直感的把握を現実の資本主義生産過程のなか

で理論的に基礎づけていく思索の過程であった。その理論は、一者的な一次元的構図から、時間性を内包する四次元的構図へと段階的に発展した。加えて、疎外論の理論的發展に伴い、疎外が批判的概念であることの根拠も同時に洗練されていった。

1 初期マルクス研究と廣松論争

1.1 労働の疎外／生産物の疎外（『経済学・哲学草稿』）

マルクスが「疎外」として記述したかった現象は、『経済学・哲学草稿』第一草稿における「疎外された労働」節において端的に描写されている。典型的には、以下の様な記述が見られる。

生産物の形をとった労働者の外化は、かれの労働が対象となり外的存在となるという意味をもつだけでなく、それがかれの外に、かれから独立した疎遠なものとして存在し、独立した力としてかれに立ち向かうようになることを、いいかえれば、かれが対象に投入した生命が疎遠なものとしてかれに敵対することを意味する。（『経済学・哲学草稿』長谷川宏訳、光文社古典新訳文庫、p. 93）

これによると疎外とは、労働者が自分の生命をつぎ込んだ対象物である生産物が、労働者の手を離れ、資本という疎遠な、独立した力として労働者を支配するに至る現象のことである。疎外論の研究とは、この疎外という現象がいかにして起こるのかを理論的に基礎づける試みであると同時に、疎外が人間に何をもたらすのかを示すことにより、資本主義が非人間的なものとして批判に足るとする根拠を疎外の内に求める試みでもあった。

疎外論の研究は、1932年のマルクーゼの先駆的な研究に端を発する。マルクーゼは『経哲草稿』の解釈によって、労働者が自己の労働を外在化させた対象物であるところの労働生産物が他人のものとなり、労働者自身にとって無縁な対象になることを疎外を中心に据えた（Marcuse1932, 邦訳 p. 20-21）。このことがなぜ労働者にとって人間の「現実性剥奪」、すなわち人間性の喪失となるかということ、マルクーゼは次のように説明している。マルクーゼによると、「マルクスは、『現象学』全体をとおして多様な形態でくりかえされている「自己外在化および自己疎外としての自己対象化」とこの疎外の「止揚」（わがものとする）の運動のなかに、人間の歴史運動に対するヘーゲルの発見を見出して」（Marcuse1932, 邦訳 p. 81）いる。その上でマルクスは、ヘーゲルにおいては「意識」や「知」の思弁的な運動として行われるこの過程が、現実には「歴史的なものとして人間の実践そのもののなかに基礎をもって」（同上、p. 88）、すなわち、労働＝生産行為を通じて行われてきたと考えた。つまり、マルクスにとって本来労働とは、人間にとって負担でありながらも必要不可欠である積極的意味を持つものであり、人間がそれを通じて自由や人間らしさ、自分らしさを獲得する「自己産出行為」である（同上、邦訳 p. 26-27）。だからこそ、生産物が他者のものであるということは、疎外の止揚と労働を通

じた自己の陶冶という人間の基本的活動を阻むものとして批判されるのである。以上の解釈は、マルクスが「物の疎外」および「自己疎外」（『経哲草稿』, p. 99）としているものに相当する。

加えて第一草稿では、上記のような意識的で自由な産出行為とそのような活動に基づく社会的紐帯が、動物と人間を分かち人間の「類的本質」であるとも論じられ、所謂「類の疎外」があるとされている（同上, p. 101）。第三草稿において、共産主義は「人間の本質をわがものとするような試み」であり、「社会的な人間の、つまり人間的な人間の、完全な回復である」（同上, p. 145）と主張されているのは、そのような意味においてである。

動物は、その生命活動と隙間なくぴったり一体化している。動物は生命活動そのものなのだ。たいして人間は、生命活動を意志と意識の対象とする。…意識的な生命活動をおこなう点で、人間は動物的な生命活動から袂を分かち。そのことによって初めて人間は類的存在である。いいかえれば、人間はまさしく類的存在であることによって、意識的な存在であり、みずからの生活を対象とする存在である。だからこそ、その活動は自由な活動なのだ。この関係が、疎外された労働によってくつがえされると、人間は、まさしく意識的な存在であるがゆえに、かえって、生命活動というおのれの本質を、たんなる生存のための手段にしてしまう。（『経哲草稿』, p. 102）

この記述に見られるように、『経哲草稿』におけるマルクスは、人間は動物とは異なり、すべての「類」を自分の対象物とし、あらゆる存在物のなかに潜む可能性を認識し利用することができるとしたうえで、人間はその類的本質としてそうあるべきであると主張している。そしてそのためには、資本主義における「疎外された労働」ではなく、共産主義における「本来の労働」とも言うべき活動が望まれる。このように、『経哲草稿』における疎外論はマルクス自身がえがいた「人間の存在基底」から出発していると言える（Marcuse1932, 邦訳 p. 29）。

以上のように、『経哲草稿』における疎外論には大きく二つの特徴がある。第一に、「生産物からの疎外」または「労働の疎外」を中心としていることであり、第二に、哲学的な人間本質主義が見られることである。ここでは差し当たり、労働生産物の獲得は自己と対立する自然をわがものとするという人間の止揚過程であること、そのために労働は自分のためのものでなければならぬということが中心的に述べられている。言い換えれば、「私は『人間』として、『物』とどのような関係であるべきか」「私はどのように労働すべきか」という人間哲学的な問いが課題とされており、「私」から生産物を奪っていく存在としてほんやりと想定された資本家を除き他者の存在は捨象されているように思われる。この意味で、『経哲草稿』における疎外論はあくまでも「私」という一者を中心とした人間哲学であり、「点」的な一次元的構図であると特徴づける事が出来るだろう。また、疎外を批判する根拠としては、人間が主体的自己であるためには自然（客体）を己が物とするような労働が不可欠であり、それが自然的なる動物とは異なる人間の類的本質であるという、マルクス自身の人間観が提示されている。

1.2 廣松による本質主義批判と規範主義的応答

疎外論研究は戦後本格化し、日本でも1950年代から60年代前半にかけて『経哲草稿』の疎外論に注目した研究が行われた²⁾。ところが1969年に廣松渉が、疎外論は青年マルクスの未熟な思想であり、『ドイツ・イデオロギー』以降のマルクスは物象化論に歩を進めたと主張し論争を呼んだ。本筋からはやや逸れるものの、この節では廣松テーゼに対する筆者の認識と見解を述べる。

まず廣松の主張では、疎外論は実体的な「人間なるもの」=絶対的能動主体の存在を前提したうえで、「主体的なものの物的な存在への転化」を言い立てる理論であり、近代哲学における主客二元論の枠組みを無批判に受け継いでいる。それに対し物象化論では、間主観的な関係性を「第一次的な存在」として捉え、諸個人は「諸関係の結節」として存在するとされる。すなわち物象化とは、「人と人との関係が物的な関係・性質・成態の相で現象する事態」であり、疎外論が主張する「人格的=主体的なものの物象化=客体化」からは思想的な断絶が見られる（廣松1996, p. 101-104, 強調は原文のまま）。

このような廣松の断絶説を全面的に批判したのが、岩淵と岩淵を継承した田上である。岩淵の廣松批判の要点は大きく2つある。

第一に、疎外論が「本質主義」であるという批判に対し、疎外概念は人間本質の存在を前提とした存在論的・記述的な概念にとどまるのではなく、人倫に関する規範的な概念であるとした点である。岩淵は、「哲学や倫理学の枠内で疎外について論じられる場合には、人間本性とは、規範的概念として、人間がそれであるべきところのものという意味での価値として、理解される」（Marković1968, 邦訳 p. 93）というマルコヴィチの見解を積極的に継承し、マルクスがフォイエルバッハを超えた独自の規範的概念を発展させたとする。さらに、もしマルクスがそうした規範的な概念を放棄したとするならば、必然的に現れるのは機械的決定論的な歴史観であり、疎外論拒否はスターリン主義を正当化するイデオロギーであるとも主張された（岩淵2007, p. 70）。

第二に、廣松の「断絶説」に対して、マルクスの物象化論は疎外論からの直接の発展であり、物象化は疎外の直接の結果として、疎外を前提としているとした点である（同上, p. 179）。このように考えれば、後期マルクスが「疎外」の語を使用する頻度が減少したとしても、経済学的な物象化分析自体に疎外論が前提されていることになる。ただし、岩淵は物象化のことをあくまでも「人格が物象に転化する」こととして捉えており、人と人との関係が物として現象するという意味で「物象化」の語を用いた廣松とは認識が異なる。岩淵は人間の人格から出発し、疎外→物象化→物神崇拜と派生していく単線的な過程を描いているのに対し、廣松は、人格の第一次性そのものを否定している。

では、マルクスの *Versachlichung* の解釈として岩淵と廣松のどちらが正しいのかという問いについて、田上は岩淵を支持し、次の様に回答している。田上によると、まず *Versachlichung* とは *Sache* にさせられる（「物件化」）という意味であり、通常のドイツ語の用法に従えば、*Sache* と対比されるのは *Person*、すなわち人格である。責任能力のある行為主体である人格は、*Sache* = 責任能力が無い物 (*Ding*) の様に、「単なる手段」として扱われてはならない。このカ

ントの有名な道徳律を資本主義が犯しているという事実を、労働者の形式的な「自由意志」の存在に惑わされずに見抜いたのがマルクスなのである。田上に言わせれば、廣松は「物象化」という恣意的な訳語によって、本当は物ではない何か（関係性）が物のように現象する（認識論的事態）という独自の形而上学的な思想をマルクスの「拡大解釈」として展開しているにすぎない（田上 2013, p. 95-117）。

以上の様にまとめられる廣松-岩淵・田上の論争に対する筆者の見解を述べると、まず、疎外論が規範概念としての側面を持っており、マルクスが後年もそのような批判意識を持ち続けていたという点に関しては岩淵に同意する。また、マルクスは人格が存在論的に「諸関係の結節」であるというような哲学を打ち出したことはなく、廣松がマルクスを「拡大解釈」したという指摘も否めない。また、田上の言うように、物象化は少なくともその一部を乗り越えるべき現実の転倒であり、認識上の事態ではない³⁾。他方で、後期著作において物象化は、人格そのものではなく、「人格と人格の関係」が物と物の関係として現れ、そのような物象が現実的な社会的力を獲得する事態である。その根拠として、「商品形態は人間にたいして人間自身の労働の社会的性格を労働生産物そのものの対象的性格として反映させ、これらの物の社会的な自然属性として反映させ、したがってまた、総労働にたいする生産者たちの社会的関係をも諸対象の彼らの外に存在する社会的関係として反映させる」（『全集』第23巻a, p. 97-98）という、『資本論』第1巻第1章第4節における記述が挙げられる。ここでは直接的に *Versachlichung* という語は用いられていないものの、ここでの分析が物象化を論じたものであることは明らかである。『資本論』における重要概念である商品とは、私的労働としての人間の諸関係が社会的総労働の中に配置され、「価値」という物象的な形態を与えられたものとして理解される（佐々木 2018, p. 133-147）。以上の見方から、マルクスには廣松の言うような関係を第一義とする哲学は存在しないものの、同時に人格の物件化のみには回収できない、人格と人格の関係から生じる物象化論は存在するというのが筆者の結論である。

1.3 交通の疎外／貨幣交換における疎外（『ミル評註』）

廣松の問題提起と並行して、1969年にラーピンによって、『経哲草稿』と『ミル評註』の執筆順序が「第一手稿」→『ミル評註』→「第二、第三手稿」の順であることが明らかにされた。この事実によっても、廣松を含む本質主義的な疎外論認識は再検討の対象となり、規範主義的解釈へと移行が進んだ。というのも、第一に、疎外論は「第一手稿」における「疎外された労働（自己疎外）」だけではなく『ミル評註』における「疎外された交通（相互疎外）」という異なる理論をその射程に含んでいること、第二に、『ミル評註』の理論水準が「第一手稿」よりも高いということが示されたからである（韓 2010）。

『ミル評註』では、次のように述べられている。

外在化された私的所有すなわち交換取引のさきにもた未熟な姿態では、二人の私的所有者お

のおおは、自分の欲望と自分の素質、それに手もとの自然材料が直接彼を駆りたてるものを生産していた。だから各人は、自分の生産の余剰分だけを他人と交換したのである。労働は、なるほど彼の直接の生計の源泉ではあったけれども、同時にまた、彼の個人的な実存の確証でもあった。ところが交換によって、彼の労働は部分的に営利の源泉となった。…営利労働は、次のことを含んでいる。(1)労働主体からの労働の疎外と偶然性。(2)労働対象からの労働の疎外と偶然性。(3)労働者が社会的欲望によって規定されること。…(4)労働者にとっては、自分の個人的実存を維持することが活動の目的となり、彼が行う現実の行為は、彼にとっては手段の意味しかもたないこと。…したがって、私的所有関係の内部では、社会的な力が大きくなり完成されていけばいくほど、人間はそれだけますます利己的になり、没社会的になり、人間固有の本質からますます疎外されていくのである。(『マルクス＝エンゲルス全集』(以下『全集』)第40巻, 大月書店, p. 373-374)

『ミル評註』に特に注目した望月は、「労働生産物の疎外」＝「自然の疎外」から「労働の（自己）疎外」を演繹的に導き出す従来の解釈を否定し、労働の相互補完（協業）という「交通」が「交換」という疎外された形態を取る結果、本来人間的＝ゲマインシャフト的であるはずの労働が「営利労働」となり、自己疎外（の固定化）が起こるとした（望月 1973, p. 117-122）。そもそも先に確認したように、「自然の疎外」や「人間の自己疎外」それ自体は、人間の自己産出過程における一契機であり、労働と生産物の交換は人間的活動として肯定的に捉えられる可能性を秘めたものである。であれば、批判理論としての疎外論において、人格が物に外化されるという「労働の疎外」を指摘するだけでは片手落ちであると言わざるを得ない。注目すべきは「外化の止揚」を不可能にするような「社会的な力」とは何かということであり、すなわち「そこでの共同体成員間『交通』はいかなる性格の『交通』であるか、そこでの外化＝疎外はいかなる形での「享受＝領有」において完了するのか」（同上, p. 115）ということなのである。では、「疎外された交通」とは何か。それは端的に言うとは貨幣交換の事であり、「社会的な力」とは貨幣のことである。

貨幣の本質は、さしあたり、そのうちに所有が外在化されていることにあるのではなく、人間の生産物がそれをつうじて相互に補完しあうところの媒介的な活動や運動、つまり人間的・社会的な行為が、疎外されて、それが人間の外に存在する物質的な物の、すなわち貨幣の属性になっていることにある。…物と物との関係そのもの、物を操作する人間の作用が、人間の外に、しかも人間の上に存在するある実在の作用になっている。この疎遠な仲介者——人間そのものが人間にとっての仲介者になるのではなくて——を通じて人間は、自分の意思、自分の活動、他人にたいする自分の関係が、自分からも他人からも独立した力となっているのを直感する。(『全集』第40巻, p. 364)

『ミル評注』において貨幣は「価値の価値としての現実的な実存」であり、価値とは「私的にたいする私的所有の抽象的な関係」である。ここでは二人以上の人間の関係が貨幣という物の属性となるという、物象化論の萌芽が見られる。ところが『ミル評注』においては物象化論が前傾化することなく⁴⁾、貨幣は疎外された私的所有であり、私的所有は外化された類的活動だから、すなわち貨幣交換ではない余剰生産物の融通は人間本質的な交通で、貨幣交換は疎外された交通であるというように論が展開されている（望月 1973, p. 119, 132）。私的所有物の（貨幣）交換においては、私は相手を相手が所有している対象物としてしか見ず、また逆もしかりである。それゆえに私もまた私自身の所有する対象物に外在化され、人間の本質から疎外されることになる。

以上の検討から、「ミル評注」は『経哲草稿』に比べ次のような理論上の進展を有している。

まず、私的所有とその結果生じる貨幣に疎外の止揚を妨げる社会的な力を見出すことにより、「疎外された労働」の理論を補完している。『経哲草稿』においては、資本や資本家の外的な強制力による労働者と生産物の物理的な引き離しが指摘されるにとどまっていたのに対し、『ミル評注』では、貨幣という媒介物の存在がいかんして労働者と対象物を疎遠にするのかということが明らかにされている。ここで理論上重要になるのは、貨幣を間に挟んで私と相対し、私の所有物を欲望する他者の存在である。「労働の疎外」が一者（点）によって完結する最も単純な構図であったのに対し、「交通の疎外」は「私」と「あなた」という二者、そしてその間に挟まり人格的關係を疎外する「物」という三者が直線状に並ぶような構図となっている。

加えてこの他者の存在は、疎外批判の根拠においても鍵である。望月は、『ミル評注』においてはゲマインシャフトが『経哲草稿』における人間の「類的本質」に相当するとし、マルクスが「類的存在」の規定を発展させ、ゲマインシャフト的な市民社会を人間社会のあるべき姿として想定していたとする（同上, p. 121-122）。根拠とする哲学者がカント（田上）からヘーゲルへ、すなわち人格から諸人格の関連（社会）へと重点が移っているものの、このような望月の見方は規範主義的解釈を岩淵らと共有していると言えるだろう。まとめると、本質主義的疎外論は労働過程において人格が物化するという事態そのものに重点を置いたのに対し、規範主義的疎外論は、人格が物として扱われるという人間同士の関係の在り方に非道徳性を見出している点に脱本質主義的な特徴があると言える。

2 廣松の克服と疎外論の再検討

2.1 規範主義的解釈の課題

岩淵・望月らの研究により、物象化論と疎外論の間には思想的断絶があり、後期マルクスにおいては疎外論が打ち捨てられたというようなマルクス解釈はほぼ退けられたと言ってよい。しかしながら規範主義的解釈が、廣松の提示した疎外論への批判自体に答えているのかという点にはやや疑問が残る（高田 2015）。というのも、廣松の批判の眼目は、主客二元論図式の哲学的検討

もさることながら、その主客二元論図式を基盤とした価値評価自体にあると思われるからである。廣松によると、疎外という用語法は暗黙の裡に「疎外されざる」状態を理想形として想定し、疎外状態からの回復が必然であるかのような価値評価を含んでしまっている（廣松 1996, p. 60）。規範主義的解釈は存在論的な本質主義を脱してはいるが、あまりに道徳的・理想主義的な人間主義であるように見られることには変わりないのである。

筆者としては、疎外が「人間の実現」を目標とする批判的概念であるということ自体は否定しないし、むしろそのことに疎外論の固有の意義があると考えている。しかしながら「疎外から物象化へ」という廣松のテーゼが一時期かなりの影響力を有したのは、先のような廣松の人間主義批判には、マルクス解釈という枠組みの外部で一定の説得力が存在するからであるとも考えられる。したがって、疎外論は規範概念であるとして満足するのではなく、その規範自体の人間学的な根拠は何かということに対する終わりなき検討がなされるべきである。その意味で、誤解を恐れず言えば、むしろ最小の人間本質を模索し切り出すことが最終的には求められると思われる。

加えて、規範主義的解釈にはもう一つの難点がある。それは物象化論を疎外論に包摂してしまうことで、マルクスが『資本論』において一見して哲学を廃した精緻な資本分析を行ったその意義を、疎外論の中で位置づけることがかえってできなくなってしまうということである。物象化論に固有の意義を認めず、後期マルクスにも疎外論が存在することを示して事足りりとしてしまうと、前期著作にこそ疎外論の原理論があり、後期著作は付加的な現状分析であるというような解釈に陥ってしまう。マルクスを疎外論として読むということを貫徹するならば、むしろマルクスが物象化論を獲得したことによって疎外の構造理解がどのように発展したのかということをも明らかにする必要があると思われる。

2.2 疎外論の再評価の試み及び物象化論との関係

おおもむねこのような問題意識が共有された 1985 年前後から、マルクスの著作における疎外論と物象化論の関係性を検証するとともに、疎外の主観性を重視することにより、物象化論にはない疎外論固有の意義を再評価する試みが見られた。

例えば佐藤は、「疎外について多くが論じられたにもかかわらず現実的に疎外を克服する方法が見出されなかったということだけではなく、疎外概念の多義性及び疎外論の人間主義的限界が明らかにされた」としつつ、「しかし、物象化論もまた、人間主義的要素を排除したがゆえに、歴史主義か相対主義に陥るという限界を呈している」と指摘する（佐藤 1984）。その上で佐藤は、「物象化概念は、社会的諸関係の現実的転倒および意識上の倒錯視を表す事実概念であり…これに対して疎外概念は、人間とその産物、社会的諸関係および意識など、主体と客体との対立的関係とその結果としての否定的な意識・経験のあり方を表す」として、「経験としての疎外」という見方を提示した。「経験としての疎外」は、自己を異質で疎遠なものとして感じるという個人の感覚であり、「特定の人間の本質あるいは正常性を前提とした診断者の立場からとらえた疎外」と対比される。同様に平子は、「疎外とはヘーゲルによれば、主観的個別的意識と癒着して

いる個体が、彼らの相互行為の結果形成される物象化された社会秩序にからめとられることによって、主観的個別的意識を打ち碎かれることである」「物象化という客体的世界の形成を個体の経験として主体的に捉え返す方法が疎外論なのである」（平子 1991, p. 195,196）とし、主体分析の方法として疎外論を提示している。

革命の根拠は物象化かそれとも疎外かというかつての論争にはっきりと現れているように、マルクス主義には、方や歴史主義（唯物史観）に基づく強硬な前衛党主義があり、方やそれに対抗する実践性に乏しい理想主義的な人間主義があった。その両者を克服するためには、学者が一方的にあなたは疎外されていると診断する「診断としての疎外」ではなく、人々の直接的な意識に上る「経験としての疎外」の在り方を物象化との連関において明らかにし、疎外論を個々人が脱物象化を志向し自発的に連帯する契機として位置付けることが求められる。

3 物象化的疎外論の展開

本章では、物象化的疎外論（後述）の文脈にある比較的新しい先行研究を参照しながら、『ドイツ・イデオロギー』以後の疎外論の展開を検討する。

3.1 分業（私的労働）における物象化と疎外（『ドイツ・イデオロギー』）

『経哲草稿』において労働が、『ミル評注』において貨幣交換が主題になっていたとすれば、『ドイツ・イデオロギー』における主題は分業である。

狩人、漁師、牧者または批判者になるという、社会的活動のこの固定化、われわれの手におえずわれわれの期待を裏切りわれわれのはからいを無に帰せしめるわれわれ以上のなにか物的な力への、われわれ自身の産物のこの凝固化は従来の歴史的発展における主要契機の一つであって…労働の分割によって必須となったさまざまな個人の協働という事から生じる幾層倍にもなった生産力、この社会的な力はこれらの個人には、協働そのものが自由意志的ではなく自然発生的であるがゆえに、彼ら自身の統一した力としては現れないで、なにか疎遠な、彼らの外にある強制力として現れる。（『全集』第3巻, p. 29-30）

資本主義社会では労働が社会的に分業化されているが、分業社会における労働は個々人の自由意志に基づいて行われるのではなく、生まれや適性といった自然的素質によって「自然発生的に」決定される。そしてそのようにして編み出された労働の社会的編成はそれ自体が一つの「生産力」として固定され、個々人には制御できない物的な力となる。この社会的力は物象化の産物であり、私たちは物象としての強制力に直面したとき自身の目的意志を挫かれ、疎外を経験する。

この文章に見られるように、また他の箇所における「この『疎外』—— 哲学者たちに分かる言い方を続けるなら…」（同上, p. 30）という記述からも明らかなように、『ドイツ』より後の著

作においては直接的に「疎外」という用語が登場する頻度が減少し、その代わりに「疎遠な力」という表現が中心的に用いられるようになっていく。「疎外」または「疎外すなわち外在化」という用語は、まず自己があり、それを物化するという自己疎外のことを指していた。もしくは「交通の疎外」においては、人間を直接人間として扱うのではなく、彼が物化した物として彼を扱うことを意味していた。それに対し、社会的諸力に疎遠であるとは、私の意図や目的に反した客体的（物象的）な社会的強制力が存在し、それに主体として相対しているという状況の事を指している。このような構図を有する疎外論の事を「物象化的疎外論」と呼ぼう。物象化的疎外論における主体-客体という用語法は、人間=主体 vs 物=客体という図式とは異なり、主観-客観に近い。物象化的疎外論に分類される所説において、主体は意識と経験を持つもの、客体は非観念的に実在するものという意味で使われているように思われる。

主体が物象に相対することが疎外であると位置づけられるとして、分業において物象化はどのようにして発生するのだろうか。日山は社会的力としての物象化を、「一定の歴史的『場』における本源的関係項」であるような項Aと項Bに対して析出された合成ベクトルCとしてイメージしている（日山2021）。文中のツンフトとの対比⁵⁾によって、『ドイデ』における「分業」が少なくともマニユファクチュア以降の細分化された労働を指していることは明らかであるから、項Aや項Bは人格的紐帯から解放された人々の「自由な」労働である。個々人の「自由な」労働は「私的労働」とも呼ばれるが、この私的諸労働は交換を通じて社会的総労働の中に位置づけられ、絶えず「価値」として抽象的人間労働に還元される（『全集』第23巻a, p. 98-99）⁶⁾。そして私的諸労働の社会的関係から導出された「価値」という新たな社会的基準が合成ベクトルCに相当し、その物象的な力は自由なはずの労働者を服属させることになる。物象化的疎外とは、このような、社会的物象態が「個々人の意図あるいは目的意識的な行為から独立し、逆に諸個人を一定の可能的地平の範囲において規制・制御し支配するという顛倒した社会現象」（日山2021）を指すのである。

このように見ると、問題は分業そのものではなく、個々ばらばらに行われる「私的労働」であることが分かる。経験から考えても、私たちは職業としての分業そのものに対して疎外を感じるということはあまりない。一般に小自営業者や専門職業者は自身の小経営や専門性に誇りをもっており、『ドイデ』で語られるように毎日朝に夕に違う仕事をしたいとは考えていない。彼らを「労働者」の枠組みから外すとしても、ある探坑夫へのインタビューによると、彼は危険で日々代わり映えしない賃金労働に従事し、労働組合運動にも積極的に参加していた人物であるにも関わらず、それでも探坑夫であること自体をやめたいとは決して考えていなかったという。彼が疎外と呼べるものを感じたとすれば、それは労働条件を改善するために仲間と連帯して抗議することが無意味になった時であった（Bloodworth2018, 邦訳 p. 247-255）。現代の分断された労働者が陥っているように、分業が完全なる「私的労働」になったとき、それは価値という「どんな社会的仕組みをもってしても彼らの手に負えない或る偶然的なもの」（『全集』第3巻, p. 73）に対して無防備になる。だからこそ、「ほんとうの共同態において諸個人は彼らの連帯のなかで、

またこの連帯をとおして同時に彼らの自由を手に入れる」(『全集』第3巻, p. 70) という事ができるのである。

『ドイデ』における疎外論の理論的特徴をまとめると、『ミル評注』における「営利労働」論では、相手を物として眼差し、金儲けのために労働や交換を行うことが倫理的悪であるという印象を残しているのに対し、「私的労働」論では、非協働的な分業が個々人の意図に反して必然的に貨幣を導いてしまうことがより明瞭になっている。したがって、規範主義的解釈が直線的な二者関係に集約できたのとは異なり、「私的労働」論における物象化的疎外論は、第三のベクトルを必然的に伴う二次元的な構造への拡がりがあると言える。それと同時に、疎外批判の根拠が諸個人の活動意志や目的の妨害に置かれ、特定の「人間的」な社会関係を理想とする傾向が弱まっている。

とはいえ、「私的労働」論だけでもまだ不十分である。理論的には貨幣が人間の疎外形態であるにしても、自由な労働によって自らの生産した商品の価値が、社会的必要労働に占める自分の労働の量を公正に表していると感じることができるならば、自らの労働を「疎遠な」貨幣によって計られるということ自体は一概に憎むべきことではないかもしれない。では、一体何が経験的疎外の持つ「私たちは排除されている／奪われている」という感覚をもたらすのだろうか。そのことを明らかにするためには、分業から大工業へ、貨幣から資本へと分析の歩を進めなければならない。

3.2 大資本制における物象化と疎外——「外化」と「疎外」——(『経済学批判要綱』)

『経済学批判要綱』(以下『要綱』)においては、私的労働と交換価値の実現という分業論を経て、ついに資本主義生産に分析の歩が進められている。前段とやや重複するものの、初めに『要綱』における分業論の洗練とそれに伴う用語法の変更を確認しておこう。

諸交換価値の実現としての流通のうちには、次のことが含まれている——。…(2)私の生産物は、すでに外化されてしまって、他人のためのものとなってしまっているかぎりでのみ、私にとって生産物であるにすぎないこと。(3)他人がみずから彼の生産物を外化するそのかぎりでのみ、私の生産物は他人にとってのものであるにすぎないこと。…流通は運動であり、この運動では一般的外化は一般的領有として、また一般的領有は一般的外化として現れている。ところでこうした運動の全体が社会的過程として現れれば現れるだけ、またこうした運動の個別的諸契機が諸個人の意識した意志や特殊の諸目的から出発すれば出発するだけ、過程の総体はますます自然的に成立する客体的連関として現れる。しかも、意識した諸個人の相互作用から出てくるものではあるのだが、彼らの意識のうちにもなく、全体として彼ら諸個人に服属させられることもないような客体的連関として現れる。諸個人自身の相互的衝突が、彼らのうえに立つ、疎遠な〔fremd〕社会的力〔Macht〕を彼らにたいして生産する。(『資本論草稿集』第1巻, 大月書店, p. 205)

「外化」とは、『要綱』においては「自分の客体的諸条件にたいして — だからまた自分自身によって創造された客体性にたいして — 他人の所有物にたいする様態で関わること」（『資本論草稿集』第2巻，大月書店，p. 178）と定義されている。佐々木は『経哲草稿』において同一視されていた「疎外 *Entfremdung*」と「外化 *Entäußerung*」という二つの概念が、『要綱』においては区別されていることを指摘している。佐々木によると、諸個人が「自由に」行う私的労働と交換という「外化」が「物象の社会的連関とそれを媒介する物象の社会的力＝価値を生み出す」すが、そのような「外化」が一般的になり物象的連関が強固になると、成立した客体的条件は主体でもあるところの諸個人から「疎遠な」ものになってしまう（＝疎外）（佐々木 2018，p. 249-252）。

長島もまた、『要綱』において「労働の外化」や「労働の譲渡」に言い換えられているような事態を「第1の疎外」、労働過程において労働の対象的諸条件〔生産手段〕が対抗的な力として現れてくることを「第2の疎外」して区別する姿勢を見せている（長島 2018，p. 92-94）。長島は、物象化はそもそも第1の疎外を前提としているという意味で、物象化は疎外を前提としていると述べている。しかしながら、「外化」と「疎外（疎遠な）」の意識的な使い分けが示唆するのは、初めに自分の所有物や自身の労働活動および他者を「物」（客体的条件）として扱う人間の態度それ自体が、すぐさま経験的な疎外として現れるわけではないということである。「経験としての疎外」として現れるのは長島の言う「第2の疎外」であることを鑑みると、「第1の疎外」は今後「外化」と呼び変え、「第2の疎外」を「疎外」として扱うほうが混乱しないであろう。

まとめると、外化が一般的となり、全体の「客体的連関」が物象として現れてくると、それは各人に対して「疎遠な」力となる。これが物象化的疎外である。このことを交換一般から資本主義生産に拡張したのが次の記述である。

資本が交換で手に入れる労働は、生きた労働として、富の一般的生産力として、富を増加させる活動としての労働である。…労働者は現存する一つの大きさとしての労働能力と引き換えに、その労働能力の創造的な力を譲渡するのであるから、この交換によって富むことができないことは、明らかである。むしろ、われわれがこれからあとで見るように、彼の労働の創造的な力が、資本の力として、疎遠な力〔*fremde Macht*〕として彼に対立する位置に置かれるのであるから、彼は貧しくならざるを得ないのである。彼は富の生産力としての労働を外化し〔*sich entäuße*〕、資本は労働をそうした生産力として自分のものとする⁷⁾（『資本論草稿集』第1巻，p. 371）。

外化された労働によって生み出された資本は物象として力を持ち、労働者はそれと疎遠なものとして対立する。長島は、大資本制における疎外と物象化の関係について、「労働の疎外は、それ自体が労働の産物である労働手段と原料等の生産手段が資本の社会的形態〔自己増殖する価値〕を取って労働自身に疎遠な社会的力として労働者に対抗するという資本と労働の対立的契機を内蔵しているのに対して、物象化は、資本という一定の歴史的に独自の生産関係が生産手段と

いう物または物象として現れること、そしてその結果、生産諸要素すなわち物または物象としての生産手段それ自体、いいかえればその素材の実体が、労働に対するこれらの労働諸条件の一定の社会的形態である資本、すなわち利潤や地代を生み出す資本と一体化して見えることに存するのである。この点が疎外と物象化の基本的な相違である」(長島 2018, p. 134) とまとめている。物象としての資本は労働を吸い上げると同時に、労働諸条件として労働者の労働過程そのものを支配する。このことから労働者は、資本に対する全面的な従属——一般に「主客転倒」とされる上下関係の構築——に至るのである。

したがって、大資本制においては分業における物象化を表す二次元座標に加えて、労働を資本に回収する Z 方向の軸が追加されており、三次元的な構成になっていることがわかる。Z 軸は剰余価値率を表し、剰余価値率は資本家と労働者の社会的関係の物象化である。主体が相対する物象的力は、私的労働の社会的編成が決定する賃金の配分 (X-Y 軸) にこの資本——労働関係を表す Z 軸が加わった、三次元の合成ベクトルによって表される。

また、このような物象化的疎外論の批判の根拠であるとともに、「外化」と「疎外」を区別することの正当性を示唆しているのが以下の記述である。

労働能力が生産物を自己自身のものだと見抜くこと、そして自己の実現の諸条件からの分離を不埒な強制された分離だと判断すること、——これは並外れた意識であり、それ自身が資本に基づく生産様式の産物である。そしてそれがこの生産様式の滅亡への前兆であるのは、ちょうど奴隷が、自分はだれか第三者の所有物であるはずがないのだ、という意識をもち、自分が人であるという意識をもつようになると、奴隷制はもはや、かろうじてその人為的な定在を維持することしかできず、生産の土台として存続することができなくなってしまったのと同じである。(『資本論草稿集』第 2 巻, p. 103-104)

ここでは資本物象に支配された労働者は自らをある種の奴隷として感じ、事実そのようになっているということが、資本主義批判の根拠になっていることが見て取れる。加えてこの記述の後半の箇所、「だれか第三者の所有物」が強調されていることは重要である。これまでの議論を踏まえて推察されることは、人は己が「だれか第三者の所有物」であるときに疎外されるが、しかし、自己が自己の所有物であることは差し当たって「疎外」ではない、と言えるということである。自己を客体として見なすことは、外化である。本質主義的解釈や規範主義的解釈では、人格が物の内に対象化されるということが疎外と見なされた。しかし、労働によって具現化する自らの人格や能力を客体視し、限られた条件の中で手段として用いることは、規範主義的な診断においては疎外であるが、経験的には疎外ではない⁸⁾。そうであるとすれば、疎外経験の根源は分業論のように自らの目的意識を挫かれるということそれ自体ではなく、自分がだれか第三者に支配されているという不正の感覚である。興味深いことに、私的労働論では影を潜めていた他者が再び登場し、否定されたはずの規範主義が物象化論を取り入れた形で再び顔を覗かせる。

加えて、このような資本物象の特殊な支配力を指摘することにより、物象化的疎外論が陥りかねない二つの難点を避けることが出来ると思われる。第一に、分業を根絶することは現実的でも望ましくもないという理由で、資本主義を擁護する現状肯定論である。資本物象化は貨幣物象化とは異なり、労働の吸い上げと第三者支配というZ軸の位相を持つため、二次元的な貨幣物象を擁護したとしても、すなわち資本物象を擁護することにはならない。そして第二に、資本主義社会では人間と人間の関係はすべからず物象化されているため、資本家が労働者を一方的に支配しているという倫理的批判はあたらないとする相対主義である。たしかに、資本家は資本物象を人格的に代理=代表する存在であり、資本家の存在が資本物象を生み出すわけではない（平子2018）。それどころか、資本主義社会における資本家は、物象が人格化した存在（「物象の人格化」、佐々木2018）として明らかに「非人間的」な状況の下で「疎外」されているとすら言える。しかしながら、物象に相対した時の経験を疎外とするならば、資本家と労働者両者の経験は明らかに異質であるということもまた同時に主張することが可能であり、そこに不正が存在する可能性が見出される。

3.3 資本蓄積と疎外——「労働力」の外化——（『資本論』）

前節において、資本が労働を搾取し、労働者を支配するという縦軸の存在が指摘された。しかし重要なのは、いかにしてそのような搾取と支配が可能になるのか、またそれによって疎外の経験はどのように変容するのかということである。その鍵は、『要綱』において記述されているのは実は労働の外化ではなく、「労働力」の外化であるということにある。ただしこのことは『要綱』そのものではなく、『資本論』第一巻第四章「貨幣の資本への転化」および第五章「労働過程と価値増殖過程」を踏まえることにより、後知恵的に見いだされる。周知のように、資本が労働力の使用価値を活用して生産を行いその成果物を取得するのに対し、労働者が受け取る賃金は労働力の交換価値にすぎないということによって、剰余価値の搾取と資本蓄積が可能になる。資本の存在を殊更に強調しない『ドイデ』の分業論以前においては、自らの労働やそれを対象化したものである商品が「疎外」されたり外化されたりするとされていた。しかし『要綱』以後においては、はっきりと賃金労働と労働力の外化が分析対象に据えられている。価値や貨幣が資本へと飛躍するためには労働力の商品化が必須条件であるが、労働力商品は労働ではなく労働力が「外化」されたものである。

では、労働力が「外化」されるとはいかなる事態であるのか。労働力とは、すでに支出され商品となった私的労働ではなく、まだ現実に発揮されずに人間の内に眠っている労働である。労働力を「外化」ということは、自らの潜在的な力能それ自体を私という主体から切り離れた客体として捉え、他者に譲渡するということである。したがって、労働者の労働は資本の下で初めて現実化することになるのだが⁹⁾、そのことが意味する事態はただ資本の命令に従って働くということに留まらない。

事実、資本の生産過程では——この過程がさらに展開させられていくなかでいっそうはっきりと示されるであろうように——、労働は一つの総体—所労働の結合〔Combination〕——ではあるが、その個々の構成部分は互いに疎遠であるので、総体としての総労働は個々の労働者の業〔Work〕ではなく、またそれは、彼らが〔自覚的に〕結合する者〔Combinirender〕として互いに対して関わるのではなく、結合させられている、というかぎりでのみ、さまざまの労働者たちの協働による業なのである。諸労働の結合としては、この労働は、他人の意思と他人の知能に仕え、それによってみちびかれるもの——つまり自己の精神的統一を自己の外にもつもの——として現れるとともに、自己の物質的統一についても、機械装置、固定資本の対象的統一性に従属している者として現れる。（『資本論草稿集』第2巻，大月書店，p. 115–116）

資本主義生産の下では、労働者は外化した自らの力能を他者の手によって結合される。このようにして生み出された資本に相対する主体は決して統一的なそれとして存在することがなく、常に他者による強制された分割の下にある。加えてこの傾向は資本が蓄積され、大きくなればなるほど強まっていく¹⁰⁾。このことは私的労働—貨幣物象論では分業一般に関わる現象として示唆されるのみであったが、賃金労働—資本物象論ではよりはっきりと指摘されている。

加えて重要なのは、労働者は資本の下で分割された労働をするうちに、そのような労働に特化するように自らの能力が開発・陶冶され、非賃金労働者として自らの力能を自らの制御に置くことがもはや不可逆的に不可能になってしまうという点である。このことが意味するところは大きいと考えられる。

つまり労働能力にとっては、自己自身の労働が、原材料および用具がそうであるのとまったく同様に、他人の〔疎遠な〕もの——…——他人の所有物として——現れるのであり、…自己の生活諸条件から分離されて存在するたんに主体的でしかない労働能力としての自己から、あらためて苦役〔drudgery〕が始まるのである。（『資本論草稿集』第2巻，大月書店，p. 103）

この最後の部分こそは、一般に労働者にとってまさに「疎外」として経験される事態である。「たんに主体的でしかない労働能力としての自己」とは、自己が単に固有の意識経験を持つという意味で主体であるにすぎず、その労働能力を他人の好きなように利用・改変される存在であることを表している。平子はいち早く疎外論を自己陶冶の問題として捉え、「個体は物象化されたシステムに支配され、そこで強制的に非主体化されることによって、同時に、個体がそれ以前に有していた行為の個体的制限を脱却して、なんらかの意味で社会化された個体として開発=陶冶させられることになる。しかし、これが個体自身の自発的な意志にもとづく営みではなく、個体にとっては同時に主体性の喪失という重苦しい意味を持たざるをえないということ、これが疎外論の基本的テーマなのである」（平子 1991，p. 213）と指摘している。すなわち、生成していく

自己が、自身から疎遠なものとして変化し、労働者という異質な存在に自らが成っていくということから、支配や搾取に対する怒りに還元できない疎外のあの空虚さ、苛立ち、無意味感、不安感が生じるのである。この主体形成の理論がなく、疎外が「もっぱら主体性喪失過程としてしか把握されないのであれば」、物象化的疎外論は「ただ、物象化論の論理を裏返しにして表現しただけ」（同上、p. 227）になる。物象化的疎外論の先の議論では、疎遠な力に支配されることによって思い通りに行動できないということが主体喪失過程として捉えられており、「疎外」という語が指す経験からはややズレが見られた。しかし資本蓄積の進展と労働能力の陶冶という生成発展過程を重視するならば、「労働者自身の諸力を労働者とは疎遠な諸力として策定」せざるを得ないという、「自己疎外」の問題を改めて扱うことが可能になる。

しかしながらその論理構成が『経哲草稿』時点から大きく発展していることは、これまでの検討から明らかである。『経哲草稿』における自己疎外論では、労働者と生産物の引き離しによる止揚の失敗が単独で焦点となっており、その具体的契機や内実は示唆されるにとどまっていた。しかし『資本論』を射程に収めた自己疎外論においては、主体は三次元的に理解される物象の力に相対していると同時に、資本の蓄積過程と並行した形での自己生産を行うことを強いられている。後者の自己疎外過程の分析は、時間の経過とともに変化する三次元空間という、四次元的な認識視座を有しているのである。

本研究の限界と展望

本研究の限界点は、差し当たり大きく二つの点が挙げられる。

第一に、本研究では『資本論』第二巻・第三巻において展開される、資本法則や利子論・信用論を祖上に載せることができなかった。これらのテーマは伝統的には宇野派が中心的に取り上げており、疎外論との接続は相対的に稀薄であった。しかしながら資本の構成が高度化し金融が肥大した現代における疎外をアクチュアルに捉えるためには、『資本論』第二巻・第三巻における分析が疎外論に及ぼす影響を検討することは急務であろう。

第二に、所謂ポスト構造主義を中心とするマルクス以後の思想潮流は、本稿における到達点である「物象化的疎外論」およびその批判的根拠である自己の主体的陶冶とそれを支配する権力という構図に対して疑問を投げかけている。例えば、フーコーの相互依存的な権力論やフロイトが確立した無意識の存在、デリダの自他境界を脱構築する人間観は、完全で独立した主体による自己統治を素朴に理想化することを限りなく非現実的にしている。加えてラトゥールは、人間と物の区別を否定し、社会関係を創造するものとして〈物神事実〉＝フェティッシュを肯定的に捉えることにより、物象化という概念自体に再考を迫っている（Latour 2009）。

とはいえ、これらポスト構造主義の思想は根本的には疎外論と対立するものではなく、資本主義批判をその中心に据える反近代、反管理社会、反権力の思想の系譜の上にある（千葉 2021）。現在のマルクス主義は未だ革命論争の延長線上にあり、国家社会主義の超克を試みるコミュニズ

ム（アソシエーションイズム）論に至っても、道徳的で啓蒙された人々によるユートピアというイメージを拭き切れていない。ポスト・マルクス思想の現実的で精緻な権力分析や人間・社会観を疎外論に取り入れてアップデートすることは、既存のマルクス主義を止揚するような、より魅力的なポスト・資本主義社会を構想する鍵になると思われる。

註

- 1) この中で直接疎外を題材にしているのはブラウナーのみだが、ホックシールドとラッツァラートは著書の中で疎外という表現を批判的に用いている。グレーバーは過去のインタビューにおいて、正統的なマルクス主義とは距離を置きつつも、「それら〔ポスト構造主義〕の議論がいくら正しくとも、人々はやはり疎外を感じている」と述べている。(Graeber2009, p. 160)
- 2) 戦後研究史の基本的な流れおよび「本質主義」「規範主義」というカテゴリーについては、岩佐(2010)を参照した。
- 3) 廣松を積極的に継承する日山は、岩淵らのような批判に対し、廣松が後に自身の「疎外論から物象化論へ」というテーゼは「人間疎外をはじめ様々な社会問題に対するマルクスの批判的アプローチの方法論的視座と論理の構成」にパラダイムシフトがあったことを主張するものであると反論した、と述べている(日山2021)。しかし紙幅の関係上、廣松の思想の解釈と評価についてこれ以上の検討を重ねることはできない。
- 4) 望月は「物象化(Versachlichung)は、なにものかが、なにかを契機として『物象的』な関係・関係帯に転化し終えているという、その結果を描写するにとどまる概念であって、『疎外』のように、その本質を外化する人間的活動そのものを動学的にあらわしていない」(望月1973, p. 344)とも述べており、岩淵らと同様に、物象化はあくまでも疎外を前提として起こるとしている。
- 5) 「労働の分割は諸都市にあっては個々の同職組合の間ではまだ〔まったく自然発生的〕であったし、そして同職組合そのもののなかでは個々の労働者たちのあいだで全然おこなわれていなかった。」(『全集』第3巻 p. 48)
- 6) 『ドイデ』における抽象的人間労働概念は以下に見られる。「一方の側にはこの生産力に対立して大多数の個人がいる。これらの人々は生産力をその手からもぎはなされており、したがってあらゆる現実的生活内容を奪われて抽象的な個人となっているのであるが、まさにそのためにこそ、彼らは個人として結ばれ合うことが出来る立場におかれるのである。」(『全集』第3巻 p. 63)
- 7) 日本語版全集では〔fremde Macht〕は「他人の力」、〔sich entaussern〕は「譲渡し」となっているが、それぞれ「疎遠な力」「外化し」とした佐々木(2018, p. 252)の訳出が適切であると考えられる。『経哲草稿』における fremd も同様に「他人の」と人格的に訳出すべきではないとする説については、平子(2018)。
- 8) このように考えることを正当化する傍証として、マルクスが所謂『バクーニン・ノート』において次のように述べていることが挙げられる。「人が彼自身を支配する時、彼はこの原理にしたがって自分自身を支配しはしない。なぜなら、彼はあくまで彼自身であり、他のものではないからである。」(『全集』第18巻, p. 644)。また、『ドイデ』における「自然発生的」と「自由意志的」を対比的に捉え、後者を評価する姿勢も示唆的である。マルクスは原始社会や封建社会で見られたような「自然発生的な」人々の人格的紐帯を神聖視することなく、(少なくとも「必然の国」の第二段階においては)自らの労働を自らで管理するためには逆説的に共同管理が必要であるということを理解して行われる、「自由意志的」な分業としてのアソシエーションを肯定しているのである。

- 9) 「したがって資本家が生産の支配者であるところでは、労働そのものは、ただ資本のうちに組み込まれたものとしてだけ生産的であるにすぎない。…資本と対立して対峙的に労働者という姿をとって存在している労働、つまり資本から切り離されて、その直接的定在のなかにある労働は、生産的ではない。」(『資本論草稿集』第1巻, 大月書店, p. 373)
- 10) 「すでに見たように、資本の蓄積の増大は資本の集積の増大を含んでいる。このようにして、資本の力、すなわち社会的生産条件が現実の生産者にたいして独立化され資本家において人格化されたものは、増大する。ますます資本は資本家をその行使者とする社会的な力として現れ、この力は一個人の労働が作りだせるものにたいしてはもはや考えられるかぎりのどんな関係ももたないのであり、— しかも、それは疎外され独立化された社会的な力であり、この力がモノとして、またこのような物による資本家の力として、社会に対立するのである。」(『全集』第25巻, p. 430)

【参考文献】

- 岩佐茂 (2010) 「疎外論の基本的な枠組み」, 岩佐茂編著『マルクスの構想力：疎外論の射程』 p. 18-39, 社会評論社.
- 岩淵慶一 (2007) 『増補マルクスの疎外論：その適切な理解のために』 時潮社.
- 韓立新 (2010) 「疎外された労働と疎外された交通」, 岩佐茂編著『マルクスの構想力：疎外論の射程』 p. 42-65, 社会評論社.
- 佐々木隆二 (2018) 『[増補改訂版] マルクスの物象化論：資本主義批判としての素材の思想』 株式会社社会評論社.
- 佐藤富雄 (1984) 「脱物象化と疎外 — 疎外論の再評価のために — 」, 早稲田大学社会学会『社会学年誌 (25)』.
- 平子友長 (1991) 『社会主義と現代世界』 青木書店.
- 平子友長 (2018) 「マルクスにおける物象化・物化と疎外の関係」『季論 21 : intellectual and creative』 40 巻, p. 262-275.
- 高田純 (2015) 「マルクスの疎外論と物象化論：その現代的な射程と意味」『唯物論』 58-59 巻, p. 13-22.
- 田上孝一 (2013) 『マルクス疎外論の諸相』 時潮社.
- 千葉雅也 (2021) 『現代思想入門』 講談社現代新書.
- 長島功 (2018) 『マルクス「資本論」の哲学：物象化論と疎外論の問題構成』 株式会社社会評論社.
- 廣松渉 (1996) 『廣松渉著作集第十三巻：物象化論』 岩波書店.
- 日山紀彦 (2021) 「『疎外論から物象化論へ』とはどういうことか」『季報唯物論研究』 第 156 号 p. 50-62.
- 望月清司 (1973) 『マルクス歴史理論の研究』 岩波書店.
- Blauner, Robert (1967), *Alienation and freedom: the factory worker and his industry, Chicago and London, Third Impression.*
- R. ブラウナー著, 佐藤慶幸監訳, 吉川栄一・村井忠政・辻勝次共訳 (1971) 『労働における疎外と自由』 新泉社.
- Bloodworth, James (2018), *Hired: Six Months Undercover in Low-Wage Britain*, Atlantic Books.
- ジェームズ・ブラッドワース著, 濱野大道訳 (2022) 『アマゾンの倉庫で絶望し、ウーバーの車で発狂した：潜入・最低賃金労働の現場』 光文社未来ライブラリー.
- Graeber, David (2009), 高祖岩三郎氏によるインタビュー (2006年) による.
- グレーバー, デーヴィッド著, 高祖岩三郎訳・構成 (2009) 『資本主義後の世界のために：新しいアンキズムの視座』 以文社に収録.
- Graeber, David (2018), *Bullshit jobs: a theory*, Simon & Schuster.

グレーバー, デーヴィッド著, 酒井隆史・芳賀達彦・森田和樹訳 (2020) 『ブルシット・ジョブ: クソどうでもいい仕事の理論』岩波書店.

Hochschild, Arlie Russell(1983), *The managed heart: commercialization of human feeling*, University of California Press.

ホックシールド, A.R. 著, 石川准・室伏亜希訳 (2000) 『管理される心: 感情が商品になるとき』世界思想社.

Latour, Bruno(2009), *Sur le culte moderne des dieux faitiches suivi de Iconoclash*, La Découverte.

ラトゥール, ブリュノ著, 荒金直人訳 (2017) 『近代の〈物神事実〉崇拜について: ならびに「聖像衝突」』以文社.

Lazzarato, maurizio(2011), *La fabrique de l'homme endetté: essai sur la condition néolibérale*, Éditions Amsterdam.

ラッツァラート, マウリツィオ著, 杉村昌昭訳 (2012) 『「借金人間」製造工場: “負債” の政治経済学』作品社.

Marcuse, Herbert(1932), *Neue Quellen zur Grundlegung des historischen Materialismus. Interpretation der neuveröffentlichten Manuskripte von Marx*, in: *Die Gesellschaft*, 2. Bd.

マルクーゼ, ヘルバート著, 良知力・池田優三訳 (2000) 『初期マルクス研究: 「経済学 = 哲学手稿」における疎外論』(新装版) 未来社.

Marković, Mihailo(1968), *Humanizam i dijalektika*.

マルコヴィチ, ミハイロ著, 岩田昌征, 岩淵慶一訳 (1970) 『実践の弁証法』合同出版.